

丸山徳次先生御経歴・御業績

御経歴

- 一九四八年一月、静岡県清水市に生まれる。
 - 一九七二年、龍谷大学文学部哲学科哲学専攻卒業。
 - 一九七八年、龍谷大学大学院文学研究科博士課程（哲学専攻）単位取得満期依願退学。
 - 一九七七年から一九七九年まで、DAAD（西ドイツ政府・ドイツ学術交流会）の奨学生としてケルン大学留学。
 - 一九八〇年、龍谷大学文学部講師。同短期大学部講師、助教授、文学部助教授を経て一九九七年、龍谷大学文学部教授、現在に至る。
- この間、京都大学大学院、大阪大学、富山大学、京都教育大学、滋賀県立大学、京都学園大学大学院等で非常勤講師を兼務。
- 一九九二年から一年間、ポーフム大学客員研究員。
 - 一九九六年、ダルムシュタット工科大学客員研究員。
 - 二〇〇四年、龍谷大学において里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター（現・里山学研究センター）の設立に関わり、二〇〇九年まで副センター長。
 - 二〇一二年から三年間、文科科学省の大学設置・学校法人審議会（大学設置分化会）専門委員（環境専門委員会）を務め、二〇一四年には環境専門委員会主査。

御業績

【単著】

- ・『現象学と科学批判』晃洋書房、二〇一六年

【編著】

- ・『岩波・応用倫理学講義2 環境』岩波書店、二〇〇四年

【共編著】

- ・『里山学のすすめ——〈文化としての自然〉再生にむけて』宮浦富保と共編、昭和堂、二〇〇七年、序章「今なぜ「里山学」か」、第四章「里山の環境倫理——環境倫理学の新展開」執筆
- ・『里山学のまなざし——〈森のある大学から〉——』宮浦富保と共編、昭和堂、二〇〇九年、序章「里山学のねらい——〈文化としての自然〉の探究——」、第十七章「森のある大学」をつくる〈物語〉執筆

【共著】

- ・『現象学と解釈学』下巻、現象学・解釈学研究会（代表新田義弘）編、世界書院、一九八八年、第八章「日常の彼岸と此岸——フッサールからシュツツヘ——」執筆
- ・『哲学のエポック』辻村公一・佐藤三千雄・小熊勢記・神子上恵群編、ミネルヴァ書房、一九九一年、「フッサール」および「ワイトゲンシュタインと分析哲学」執筆

- ・『医療とバイオエシックスの展開』高島學司編、法律文化社、一九九四年、第二章「生命倫理学と環境倫理学」について——統合的視座を求めて——」執筆
- ・『知と信』佐藤三千雄編、永田文昌堂、一九九四年、「暴力の現象学的批判に向けて——〈平和の教学〉のために——」執筆
- ・『理性と暴力——現象学と人間科学』現象学・解釈学研究会編、世界書院、一九九七年、第九章「暴力」行為と構造的暴力——或る傷害事件を見る眼」執筆
- ・『生命倫理学を学ぶ人のために』加藤尚武・加茂直樹編、世界思想社、一九九八年、Ⅲ—三「生命の倫理・自然の倫理——公害病の生命倫理学を求めて——」執筆
- ・『環境と倫理』加藤尚武編、有斐閣、一九九八年、第二章「文明と人間の原存在の意味への問い——水俣病の教訓——」執筆
- ・『日本思想史における国家と宗教』福嶋寛隆編、永田文昌堂、一九九九年、「戸坂潤における啓蒙の問題」執筆
- ・『応用倫理学の転換』川本隆史・高橋久一郎編、ナカニシヤ出版、二〇〇〇年、第三章「われわれの応用倫理学の源泉としての〈水俣病事件〉」執筆
- ・『フッサールを学ぶ人のために』新田義弘編、世界思想社、二〇〇〇年、Ⅱ—二「空間と身体」執筆
- ・『社会哲学を学ぶ人のために』加茂直樹編、世界思想社、二〇〇一年、Ⅱ—四「権力と暴力」執筆
- ・『新版』環境と倫理——自然と人間の共生を求めて』加藤尚武編、有斐閣、二〇〇五年、第二章「人間中心主義と人間非中心主義との不毛な対立——実践的公共哲学としての環境倫理学——」、第四章「文明と人間の原存在の意味への問い——水俣病の教訓——」執筆
- ・『水俣五〇年——ひろがる「水俣」の思い』最首悟・丹波博紀編、作品社、二〇〇七年、「鏡」としての水俣病

——水俣病の／と現在」執筆

・『環境倫理学』鬼頭秀一・福永真弓編、東京大学出版会、二〇〇九年、第四章「公害・正義——「環境」から切り捨てられたもの／者」執筆

・『応用哲学を学ぶ人のために』戸田山和久・出口康夫編、世界思想社、二〇一一年、「実践的環境哲学と「里山学」の提唱——応用哲学の現場性」執筆

・『地球と人間のつながり——仏教の共生観』鍋島直樹・玉城興慈・井上善幸編、法蔵館、二〇一一年、「水俣病は「環境問題の原点」である——水俣学と里山学」執筆

・『里山のガバナンス——里山学のひろく地平』牛尾洋也・鈴木龍也編、晃洋書房、二〇一二年、第一章「持続可能性の理論と里山的自然——フクシマ以後の里山学——」執筆

・『水俣学講義「第五集」』花田昌宣・原田正純編、日本評論社、二〇一二年、第四回「水俣病の「責任」と「教訓」——哲学・倫理学からの応答」執筆

・『里山学講義』村澤真保呂・牛尾洋也・宮浦富保編、晃洋書房、二〇一五年、第一章「持続可能社会と里山の環境倫理——里山学の展開——」執筆

【論文】

・「フッサールの意味理論」『龍谷哲学論集』第一号、一九七六年

・「フッサール哲学に於ける世界問題の起源」『龍谷哲学論集』第四号、一九八〇年

・「フッサールと理論―実践―問題」『龍谷大学論集』第四二〇号、一九八二年

・ Problem und Tragweite der Schillerschen Idee der ästhetischen Erziehung, 『龍谷哲学論集』第五号、一九八三年

- ・「倫理学における生活世界の問題」『倫理学研究』関西倫理学会編、第一四号、一九八四年
- ・「科学の相対化と方向づけ——科学批判の一視座——」『龍谷大学論集』第四二四号、一九八四年
- ・「専門家と素人——科学批判の一前提——」『龍谷大学論集』第四二六号、一九八五年
- ・「ポストパラダイム科学の分析視座」(訳者解説)、『現代思想』青土社、一九八五年七月号
- ・「学部の争い以後 (Nach dem Streit der Fakultäten) ——大学への問いの地平——」『龍谷大学論集』第四三〇号、一九八七年
- ・「生活世界と合理化——ハーバーストに対する現象学的批判について——」『龍谷大学論集』第四三四・四三五合併号、一九八九年
- ・「性的差異の倫理に向けて」『龍谷哲学論集』第六号、一九九〇年
- ・「環境倫理学」の思想と歴史」(訳者解説)、『現代思想』青土社、一九九〇年二月号
- ・「科学技術と生命と倫理」『社会科学研究年報』第二一号、一九九一年
- ・「現象学と遊びの理論」『現象学年報』日本現象学会編、第九号、一九九三年
- ・「ポイテンディクの現象学的遊び論(I)——遊びの現象学的哲学に向けて(一)——」『龍谷大学論集』第四四三号、一九九三年
- ・「科学の実存論的概念への道——ハイデガーの科学論——」『龍谷大学論集』第四四四号、一九九四年
- ・「環境倫理学と科学批判」『環境技術』Vol.23, No.7, 一九九四年
- ・「遊び」と社会科学」『龍谷哲学論集』第九号、一九九四年
- ・「Spiel mit "Zwischen den Ordnungen", in: *Vor Ort denken. Stückesammlung für Bernhard Waldenfels*, Bochum, 1994
- ・「哲学的・倫理学的問題群としての(水俣病) ——「エコロジーの倫理と哲学」のためのノート——」『龍谷大学

論集』第四四七号、一九九五年

・「水俣病と倫理学」『倫理学研究』関西倫理学会編、第二六号、一九九六年

・「われわれの応用倫理学の源泉としての（水俣病事件）」『応用倫理学の新たな展開（科研費報告）』佐藤康邦編、一九九六年

・Habermas, *Phenomenology, and Modernity*. 『龍谷大学論集』第四五〇号、一九九七年

・「環境」概念について——研究ノート——』『龍谷哲学論集』第二二号、一九九八年

・Naturverständnis und ökologische Ethik aus japanischer Sicht, in: *Scheidewege. Jahresschrift für skeptisches Denken*, Jahrgang 29, 2000

・「技術と倫理（一）」『龍谷大学論集』第四五五号、二〇〇〇年

・Violence and Communication in the History and Context of Minamata Disease, in: *Review of Japanese Culture and Society*, Vol. 11-12, Josai University, 2000

・「媒介としての応用倫理学」『倫理学研究』関西倫理学会編、第三一号、二〇〇一年

・「里山の環境倫理——「里山学」構築のためのノート——」『龍谷大学論集』第四五八号、二〇〇一年

・「科学技術と責任の倫理」『社会哲学資料集Ⅰ——二一世紀日本の重要諸課題の総合的把握を目指す社会哲学的研究』平成一三年度科学研究費補助金研究成果報告集（研究代表加茂直樹）、二〇〇二年

・「環境の豊かさ」を求めて——モデルとしての「里山」『人間会議』二〇〇三年冬号

・「水俣病事件・環境正義・予防原則」『社会哲学資料集Ⅲ——二一世紀日本の重要諸課題の総合的把握を目指す社会哲学的研究』平成一三年度科学研究費補助金研究成果報告集（研究代表加茂直樹）、二〇〇四年

・「里山学の提唱」『龍谷理工ジャーナル』龍谷大学理工学会編、第一七卷一号、二〇〇五年

- ・「日本の哲学と社会学」『フォーラム現代社会学』関西社会学会編、第四号、二〇〇五年
- ・「市民がなう予防原則——環境をめぐる責任と正義——」『私たちにとつての「水俣」「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク編、二〇〇五年
- ・「公害から環境問題へ」はどのように理解すべきか?——予防原則の必要性——」『龍谷大学論集』第四六七号、二〇〇六年
- ・「里山をめぐる環境問題としての鳥獣害問題」『里山から見える世界』里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター二〇〇五年度年次報告書、二〇〇六年
- ・「津田敏秀の水俣病事件論に寄せて」『水俣病研究』第四号、弦書房、二〇〇六年
- ・「公害と予防の公共哲学・社会学」『自然再生の理念に関する環境倫理学的研究』科学研究費助成金萌芽研究成果報告（研究代表鬼頭秀二）、二〇〇六年
- ・「自然再生の哲学」〔序説〕『里山から見える世界』里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター二〇〇六年度年次報告書、二〇〇七年
- ・「予防（事前配慮）の公共哲学」『龍谷大学論集』第四七二号、二〇〇八年
- ・「森のある大学」の里山学と市民連携、(財)日本鳥類保護連盟機関誌『私たちの自然』No.553、二〇一〇年三月号
- ・「水俣病は「環境問題の原点」である——水俣学と里山学」『仏教生命観に基づく人間科学の総合研究』人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター二〇〇九年度報告書、二〇一〇年
- ・「日本における環境問題とその解決の困難さ」『エコ・フィロソフィ』研究』東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、第四号別冊、二〇一〇年

- ・『持続可能社会と森林コミュニティ』『哲学』日本哲学会編、第六二号、二〇一一年
- ・『文化的景観』とその『保全』の意味と意義『里山学研究…文化となりわいの景観』里山学研究センター二〇一二年年度年次報告書、二〇一三年
- ・『信頼への問いの方向性』『倫理学研究』関西倫理学会編、第四三号、二〇一三年
- ・『持続可能社会の条件と里山的自然』『里山学研究…里山がひらく持続可能社会』里山学研究センター二〇一三年年度年次報告書、二〇一四年
- ・『母子避難』の悲劇性と持続可能社会への希求『龍谷哲学論集』第二九号、二〇一五年
- ・『過去に学ぼう、公正な持続可能社会を形成するために』『科学』二〇一六年三月号（特集…原発事故下の五年）、岩波書店、巻頭エッセイ
- ・書評「大庭健著『民を殺す国・日本——足尾鉍毒事件からフクシマへ』」「社会と倫理」南山大学社会倫理研究所編、第三一号、二〇一六年
- ・『母子避難』の根源的な問題……生産と再生産の矛盾『龍谷大学論集』第四八九号（印刷中）

【事典項目その他】

- ・『現象学事典』（木田元他編集、弘文堂、一九九四年）の四事項項目（世界、日常、遊び、フェミニズムと現象学）、三人名項目（ボーヴォワール、ハンス・ヨナス、山内得立）を執筆
- ・岩波『新・哲学講義 4「わたし」とは誰か』村田純一編著、岩波書店、一九九八年、定義集の三事項項目（子供、死、内と外）を執筆
- ・『哲学・思想事典』（廣松渉他編集、岩波書店、一九九八年）の三事項項目（遊び、ホモ・ルーデンス、理性の他

者)、二人名項目(ホイジンガ、カイヨワ)を執筆

・『現代倫理学事典』(大庭健他編集、弘文堂、二〇〇六年)の六事項項目(技術、水俣病、環境倫理学、遊び、余暇、世代間倫理)を執筆

・『応用倫理学事典』(加藤尚武編集代表、丸善出版、二〇〇八年)、環境倫理の部門の編集責任および七事項項目(環境倫理学、環境権、公害と環境問題、土地倫理、里山の環境倫理、予防原則、水俣病)の執筆

・『現代社会学事典』(大澤真幸他編集責任、弘文堂、二〇一二年)の二事項項目(解釈学的循環、解釈共同体)を執筆

【翻訳】

・共訳: E. カリース/L. クロイスル/W. デップ/E. ルターメラ『図説: 子どもの発達と障害——発達教材・教具の工夫』同朋社、一九八三年

Elike Callies / Lothar Kraussl / Wiltrud Dopp / Elke Lutemoller, *Spiel und Lernen für Vorschulkinder*, Ernst Klett Verlag, Stuttgart, 1977

・G. ヘルメ/W. ファン・デン・デーレ/W. クローン「科学の目的内在化」『現代思想』青土社、一九八五年七月号、付説「訳者解説」

Gernot Bohme / Wolfgang van den Daele / Wolfgang Krohn, *Die Finalisierung der Wissenschaft*, in: Werner Diederich(Hrsg.), *Theorien der Wissenschaftsgeschichte*, Fm., 1978

・P. リクール「歴史経験における客観化と疎外」『現象学の展望』新田義弘・村田純一編、国文社、一九八六年

Paul Ricœur, *Objektivierung und Entfremdung in der geschichtlichen Erfahrung*, in: *Philosophisches Jahrbuch* 1974, 1. Halband

・共訳：J. ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論』下巻、未来社、一九八七年

Jürgen Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns*, 2 Bde., Suhrkamp Verlag, Ffm., 1981

・K. S. シュレーダー＝フレチェット「テクノロジー・環境・世代間の公平」『現代思想』青土社、一九九一年
一二月号、付説「訳者解説」

K. S. Shrader-Frechette, *Technology, the Environment, and Intergenerational Equity*, in: K. S. Shrader-Frechette(ed.), *Environmental Ethics*, Boxwood Press, 1981

・B. ヴァルデンフェルス「現象学とマルクス主義の緊張の場における社会哲学」『情況』一九九二年九月号別冊(現象学：越境の現在)、付説「訳者解説」

Bernhard Waldenfels, *Sozialphilosophie im Spannungsfeld von Phänomenologie und Marxismus*, in: G. Floistad(ed.), *Contemporary philosophy: A new survey*, vol.3, Hague/Boston/London, 1982.

・共訳：シュレーダー＝フレチェット編『環境の倫理』晃洋書房、一九九三年

K. S. Shrader-Frechette (ed.), *Environmental Ethics*, The Boxwood Press 1981 / 1991

・共訳：ハイデッガー全集第一巻『初期論文集』創文社、一九九六年、岡村信孝と分担訳

・ゲルノート・ベーム「哲学することの三つのあり方」『龍谷哲学論集』第一号、一九九七年

・H. フェッター「無意識の概念についての思索——精神分析と現存在分析——」『龍谷大学論集』第二二号、一九九八年

・エルマー・ホーレンシュタイン「ソクラテス——死刑(自死刑)後二四〇〇年——」『龍谷哲学論集』第一八号、

二〇〇四年

・ゲルノート・ベーム「身体的実存の倫理——鍛錬術と修辞術との間の道徳——」『龍谷哲学論集』第一八号、

二〇〇四年

・ゲルノート・ベーム『ドイツの不安』、それとも『ドイツの奇蹟』？——フクシマとドイツにおけるその帰結』『龍

谷哲学論集』第二六号、二〇一二年

・ゲルノート・ベーム『よく人間であること(Gut Mensch Sein)——ひとつの原・倫理学』『龍谷哲学論集』第二八号、

二〇一四年